矢内　琴江　　*YAUCHI Kotoe*

≪報告≫東日本大震災復興支援に関わって

On Contributing to Relief Efforts following the Great Eastern Japan Earthquake

「手間ひまおしまず、丁寧に心をこめて、つつましく」を意味する、東北地方の方言「までい」[1]。もともとは、両手、左右揃った手、を意味する「真手」という古語を意味する。最初にこの古語の意味を知った時、両手の揃った一人の人を思い浮かべ、片腕の人はこの言葉からこぼれ落ちているような気がした。ところが、『までいの力』を最後まで読み終えたとき、自分の想像力の狭さを恥じた。「までい」という言葉の深みは、単に個人の生き方だけではなく、自然も、また世界も含めた他者と支え合う生き方を示しているところにある。飯館村という掌の中で、新しきも古きも、女も男も、お互いがお互いを育みあう生き方の実践の、この記録は、原発とそれを生み出した社会のあり方への怒りとともに、これからの社会の在り様に新たな可能性も提示している。

[1] 企画編集「までい」特別編成チーム『までいの力』SEEDS 出版、2011 年、p.19.

早稲田大学ジェンダー研究所紀要　『ジェンダー研究 21』
2011 年　vol.1　©Waseda University Gender Studies Institute

さて、本報告では、いま一度私たちの社会の育んできた「までい」の力に着目しつつ、私自身が関わっている大学外での東日本大震災復興支援活動をまとめ、この「までい」という視点から震災以降を考察したい。

3月11日14時46分に発災した東日本大震災は、大地震、大津波、原発事故によって、多くの人々の命と生活を根こそぎ奪った。同時に、一人一人の生き方や、今日の社会のあり方への根本的な問い直しを迫る。他者との人間的なつながりよりも、個々人の消費に依存した社会の仕組みの限界と脆弱さが露呈された。そしてそれは、必ずしもいわゆる「被災地」ではなく、大都市においてまさに明らかになったのが、3.11だったように思う。けれども、「までい」の育んできた力は、この災害に向き合っていく中でまさに発揮されていた。ところで、この「までい」という言葉が表す他者への配慮の関係性は、飯館村以外でも、これまでにも実践され続けていた。明治44年発刊の女性解放雑誌「青鞜」が大正5年までに繰り広げた運動は、家父長制に異議を唱え、検閲や反発に抗いながら、現実と紙面を通して、他者との関係性を通して自己を育み、互いに繋がろうと試みるものだった[2]。戦後のウーマンリブや、各地の様々な女性たちの運動も、様々な方法で、個人を中心とする、男性中心主義的な都市社会的な人間関係とは異なる、

[2] 『青鞜』は今年、創刊100周年を迎え、今日的な状況を踏まえながら、「『青鞜』100年」の歩みを問い直す試みが様々なイベント・出版物を通して行われている。「『青鞜』100周年のシンポジウム」主催：国立在外共同研究所・東アジア文化研究所、於日仏会館、2011年9月8日、「今、世界が読む『青鞜』」主催：日本女子大学「新しい女」研究会／文学部／文学研究科・『青鞜』100周年記念国際シンポジウム実行委員会、於日本女子大学、2011年9月10日。

配慮の関係性に基づく生き方の実践を試みていた[3]。今回の東日本大震災でも、全国各地の女性たちのネットワークが、震災を受けて、様々なかたちで復興支援に取り組み、経済・産業の復興に重点を置いた男性中心主義的な震災復興計画に異議を唱えている[4]。しんぐるまざあず・ふぉーらむの活動は、いち早く、福島と東京の女性たちの協力で、避難所内に女性専用スペースを設置した[5]。また、他の女性支援団体とも協力し、パープルホットラインを継続することを可能にし、震災後に発生する（または深刻化する）様々な暴力に対応する相談窓口を設けて、外国の方も含めた女性たち、セクシャル・マイノリティへの支援を行っている[6]。ほかにも、各地自体の女性団体、女性センターを通してあった女性たちの繋がりや、学びの経験が、震災後、女性たちが主体的に動く力になったことも、報告されている[7]。震災から3カ月目の6月11日に行われたシンポジウムでは、こうした多くの女性たち

---

[3] 『新編　日本のフェミニズムⅠ　リブとフェミニズム』岩波書店、2009年

[4] 早稲田大学文学学術院では、東日本大震災復興支援情報コーナー運営委員会を立ち上げ、女性・ジェンダーの視点も含む、様々な視点、分野からの復興支援情報を、実践・研究・行政といった領域を問わず収集し、発信することで、復興支援に関わろうとする人々を繋げることを試みている。文学研究科の大学院生たちが中心となって活動しており、私自身も、運営に携わり、また女性・ジェンダーの視点からの情報収集を受け持っている。ここで紹介する女性に関する情報の詳細は、戸山キャンパス内の復興支援情報コーナーで閲覧可能である。

[5] 講演会「震災・原発避難・子どもと女性―福島と東京がつながるために」主催：早稲田大学公共経営研究科・東日本大震災復興支援法務PT（東日本大震災復興研究拠点・自然文化安全都市研究所）、於早稲田大学早稲田キャンパス、2011年6月12日開催。

[6] 中間報告会「震災で困っている　シングルマザー＆女性の安心ホットラインと支援」主催：NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島、於東京ウィメンズプラザ、2011年6月25日開催。

[7] 「災害・復興と男女共同参画　6.11シンポジウム」主催：日本学術会議、於日本学術会議、2011年6月11日開催。

が 300 人集い、ジェンダーをめぐる諸問題が明らかにされると同時に、人間の安全保障の観点から、男女平等の意識に根差した復興支援・復興計画の重要性を共通認識とし、女性たちの「回復力」に信頼をおいたコミュニティの再生・形成の必要性が確認された[8]。また 5 月末に発足した女性支援ネットワークは、7 月に、当事者としての女性たちの声の共有をインターネットも使いながら、大規模に行い、継続して、女性の視座に立った、多様性と人権を尊重した支援・政策の提案をしている[9]。

ところで、今回の震災で確認された「回復力」は、女性たちにおいてだけではない。3 月 12 日に立ち上げられた、学生による支援団体 Youth for 3.11 では、学生の視点からの復興支援を行っている。様々な復興支援団体と提携しながら、学生たちの力を最大限に発揮できるような復興支援プログラムを提供し、長期的な支援をしていくためにも、様々な学生たちを復興支援に巻き込むことをめざしている。これまでの災害ボランティアは、学生にとって、金銭的・心理的負担の大きいものだった。また、阪神大震災では、学生ボランティアの現地でのマナーや、一定期間を過ぎた後の激減が問題となった。そこで、Youth for 3.11 では、他の復興支援を行っている団体と提携を結び、交通費・宿泊費・食事をサポートした復興支援プログラムを用意している。全てのプログラムに、事前研修とリフレクション・セッションを含み、学生たちの心理的負担の軽減をめざす。また、ソーシャルネットワーク

---

[8] 同上。

[9] みやぎじょネットを中心とした「女の語り場実行委員会」主催で、7 月 24 日、「女の語り場　vol. 1」が開かれた。宮城県、岩手県、福島県の会場をインターネットでつなぎ、女性の抱える課題を被災地の女性たちが語り合い、これから必要な支援と施策を提案することを目的とした会。

の活用や、プログラム横断的な参加者たちの活動報告＆交流会は、学生たちが横の繋がりを作ることを促すと同時に、ボランティアを自己満足としないための情報発信・学びを目指してもいる。また、Youth for 3.11 の団体運営を通した経験・知・ネットワークを記録し、発信していくことで、この活動を後世に伝えていくことも、この団体の重要な役割である。9 月 11 日の時点で、4895 人の団体登録者があり、3 月末以来、864 人の学生たちが、ボランティアに派遣されている。現在 9 つのプログラムが展開されており、夏休み中は、一日当たり 70 数名が現地で活動していた。活動内容はプログラムによって異なるが、瓦礫撤去作業から、子供の学習支援、仮設住宅のコミュニティ形成支援までと幅広い[10]。

私自身、この Youth for 3.11 で 3 月末以来、ボランティア派遣のコーディネーターとして活動してきた。4 月の初め以来一度も途切れることなく毎週土曜日に南三陸町へと出発してくれた学生の数は、9 月末で述べ 190 人近くに達する。この派遣プログラムは、自分のやりたい支援や勉強のために行くものではなく、地元の方たちの「ただ傍にいる」という姿勢で、ふれあいを主とした活動である。そのために、一部の学生たちは、「してあげたかったこと」と現実のギャップに悩む場合もある。それでも、学生参加者たちは、一週間の活動を通して、南三陸町の方々と日々向き合い、刻々と変化する現実を引き受けながら、いま自分に出来ることを自問自答し、仲間と意見を共有し、時にぶつけ合って生活を共にする。それらは、毎日の活動レポート、帰京

[10] Youth for 3.11 全体ミーティングにおける配布資料より確認（2011 年 8 月 14 日）。Youth for 3.11 ホームページに詳しい（http://youthfor311.jimdo.com/youth-for-3-11 とは/活動詳細/）。

後のリフレクションや活動レポートで報告・記録されている。こうした活動の中で得た「言葉にならない何か」を伝えていきたい、自分の活動の中で生かしていきたい、という言葉がほぼ毎回聞かれる。実際に、その後も現地に行く者や、Youth for 3.11 の運営に関わる者、また別のところで、自分の日常生活の中で、南三陸町や、復興支援に関わり続けている学生たちが多くいる。このように、学生にとってこの活動は、一つの学びをもたらしているようだが、それは個の発達によるものでも、何か別の物との引き換えによって得られるものではない。むしろ、他者への配慮を基盤にした人間の関係性の中で、気づき、考えることで、初めて経験されることなのではないか。

この東日本大震災は、死者行方不明者合わせて 2 万人を超えた。復興という言葉は、今もなお、ある人々にとって、遠い響きを持つかもしれないし、原発被害は、現在進行形である。けれども一方で、今回の震災を通して見えてきたものもある。岩手県亘理町で被災した哲学者・岩田靖夫氏が岩手県亘理町での被災経験を通して述べている、極限状態における共助から出発した「人間愛の社会」への希望だ[12]。大災害において、「弱者」と見なされていた女性たち、「迷惑」と言われがちな若者が、他者との共生をめざし、より良い未来のための今を紡いでいる。復興支援に「女性」「学生」といった主体は関係ないのかもしれない。特に、学生による復興支援に関わりながら、復興支援を「学生」に限定することの意味について、私も考え、学生たち自身から疑問を投げかけられることもあった。けれども、この主体を置く

[12] 公開講演「大災害に関する哲学的考察―宮城で大震災を経験して」講演者・岩田靖夫、主催：早稲田大学産業経営研究所、於早稲田大学、2011 年 7 月 19 日開催。

ことが、可能にしてくれることもある。この大災害の中で、それぞれの視点に立つことは、社会の歪みや課題を浮き彫りにする。また何よりも、一人では太刀打ちできない状況の中で、このように主体を置くことは、希望をもった人が集まり、交わりの中でお互いを力づけ合うことで、集合的な力を発揮させている。この今新たに生まれている力を“までいに”育み、生かし、伝えていくことが、「復興」だけでなく、より良い世界を作ることになるのではないだろうか。

【参考文献・参考ホームページ】

岩田靖夫「人間愛の社会へ」『世界』東日本大震災・原発災害　特別編集　生きよう！　2011 年 5 月号

ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅲ　自己への配慮』田村俶訳、新潮社、2006 年

パウロ・フレイレ『新訳　被抑圧者の教育学』三砂ちづる訳、亜紀書房、2011 年

Valérie Dubé «Une lecture féministe du ‘‘souci de soi’’ de Michel Foucault: pour un retour à la culture différenciée du genre féminin», *Recherches féministes*, vol. 21, no. 1, 2008, pp. 79-98.

東日本大震災支援女性ネットワーク

〈http://www.risetogetherjp.org/〉　2011 年 7 月 21 日アクセス。